

# 繭の供給と価格弾力性

堀 田 剛 吉 (農林経済研究室)

Takeyosi HOTTA

Cocoons' Supply and Price Elasticity

繭は農産物中最も商品化率の高いものゝ一つである。このことは景気変動に対し強い影響を受ける結果となるのであるが、元来生糸は高級繊維であるから、景気の変動が著しいにもかかわらず、桑園は永年作物である関係上、それに即応して面積の増減を行うことは容易でない。すなわちこれは生産の硬直性の問題であつて、このような事象は繭の労働生産性の低廉さと共に、現在蚕糸業における最大の痛となつている。

そこで筆者は景気変動に対する繭の生産量の観点から、その適応能力を過去のデータを利用して詳細に分析し、最近の課題となつている桑樹作付制限に対する或種の示唆を提供したい。

## 1. 繭の供給

先づ繭生産量の変遷より考察の稿を進めてみたい。景気の変動は長期変動、自然条件の変化をも含む短期変動とに大きく分離されるが、一般に統計数値は両者の総合という形で表現されている。次に昭和の初より繭生産量の推移を示してみよう。

第1表 繭生産量の変遷

年次	生産量	年次	生産量	年次	生産量
	千貫		千貫		千貫
昭和1年	86,726	昭和12年	85,972	昭和23年	17,082
2	90,863	13	75,256	24	16,516
3	93,849	14	90,818	25	21,444
4	102,093	15	87,546	26	24,905
5	106,464	16	69,849	27	27,546
6	97,072	17	55,851	28	24,824
7	89,550	18	54,036	29	26,751
8	101,164	19	40,312	30	30,500
9	87,140	20	22,579	31	28,845
10	82,066	21	18,209	32	31,854
11	82,892	22	14,261	33	30,563

[資料：農林省統計表]

上表によつて観察化せられることは、主に長期的趨勢であるが、この数値より自然的・短期的な変動要因を差引いてみても、かなり長期的な生産量の変動が起つて来ていることがうかがわれる。昭和5年をピークとして、

昭和初年は我国の養蚕の盛んな時であるから、生産量も非常に多くなつている。昭和12年には日華事変が勃発し、貿易も不振となり生産量も漸次減少の過程を辿り、終戦の昭和20年に及んで貿易は再開されたが、戦時中化学繊維の目覚ましい登場によつて、昔日の生糸販売分野は著しく侵略せられて、生糸の輸出に頓挫を招いて、その生産は伸び悩み、加うるに食糧事情の極度の逼迫から桑園は食糧農産物作付に転換せられ、繭の生産は所期の成果を獲得するに至らなかつた。ところでその後食糧事情の好転と共に桑園面積も増大し、昭和25年の朝鮮動乱による好況のあおりを受けて、除々に恢復の一路を辿り、昭和32年頃までは漸増の傾向を示している。昭和33年頃は一般繊維産業の慢性的過剰によつて、またもや繭の減産が叫ばれはじめた。このように繭は生糸が上級財であるといつた含みも手伝つて、長期的な変動の振幅はかなり大きいものと考えられる。今試みに昭和元年より昭和33年(1926~1958年)までの、自然変動よりの影響を含んだ概略の趨勢変動年率を計算してみると、その数値は5.7%となる。この値はシュルツ (T. W. Schultz) その他の研究者によつて算出された、他農産物の趨勢変動率の数値より甚だしく大きいことが解る。この様な結果は製糸工業原料としての繭の地位と上級財としての生糸の特殊性に関係があると思われる。次に以上の事象を短期的に考察してみよう。

計算数値はやはり昭和元年から昭和33年までを採用し、前年度との増減(ΔS)をその年の生産量(S)で割つた結果に100を乗じた対前年変動率( $\frac{\Delta S}{S} \times 100$ )を階層別に区分してみると第2表の如くである。

第2表 繭対前年生産変動率の階層区分

階層	~ +20	+20 ~ +10	+10 ~ +3	±3 まで	-3 ~ -10	-10 ~ -20	-20 ~	計
頻度	2	6	6	2	8	3	5	32

上表のように対前年変動率は非常に大きいのであつて、マイナス面への変動はプラスの方より大きくなつて

いるし、また回数も若干多いことがわかる。なお参考までに対前年平均変動率を求めてみると、その数値は12.4%となった。この数値は大きい様に見えるが、趨勢変動率の5.7%を差引くと6.7%になり、必ずしも大きいものとはならない。これは桑樹の永年作物としての生産の安定性が関係しているものと思われる。

次に更にいくらか短期的である季節変動について論及してみよう。先づ繭の生産時期を考察すると桑葉の生産時期の相違により蚕児の飼育期は春蚕、夏蚕、初秋蚕、晩秋蚕、晩々秋蚕等となつてはいるが、地方により蚕の掃立回数やその時期もそれぞれ異つてはいる。しかし統計的にこれを春蚕期と夏秋蚕期に大別して考察すると、大正から昭和の初年までは一般に春蚕期の生産量が多い。すなわち大正元年には57.7%であつたが、昭和25年頃になると夏秋蚕期の比率は増加し、昭和32年には45.0%となつて逆に減少している。このようなことは一般に春期は繭質が優つてはいるが、この時期は挿秧その他農耕作業の関係で、労働のピークとなつてくる。そこで最近の趨勢は経営合理化の観点より労働面を重視して、繭質の面を第二次的に考えている傾向があると思われ、注目すべきことである。次に蚕期別による産繭額を地方別に一瞥してみよう。関東地方は一般に夏秋蚕期の産繭が多く、それと反対に福島県を除く東北や山陰地方では春蚕期が多くなつてはいる。更に繭生産よりみて5大県と目されている処は、昭和32年までは福島県の2.4倍を筆頭に長野県の2倍、群馬、埼玉、山梨等も1.2倍余りとなり例外なく、夏秋蚕期の産繭額は春蚕期のそれより多くなつてはいる。ところでいわゆる小県と考えられる北海道や大阪等はむしろ春蚕期が多くなつてはいる。このような事象は地方の環境条件との結びつきも肯定すべきことであろうが、また一面大県といわれる処は経営の合理化を重視し、労働配分の円滑を考えてはいる結果の表われであることも否めないであろう。しかし年間2回採桑する春秋専用桑園を前提として考える場合には、春期と夏秋期の産繭額上のバランスは左程幅広くズレることはなからう。このように繭生産は一応限られた時期であつて、生産後1週間前後の内には農協を経て、かねて団体契約を行つている取引製糸へ出荷されるのであるが、一部は乾繭後組合の倉庫に保管されるものもある。この場合でも発蛾するおそれがあるから農家の自家保有は殆んどできない。たゞこゝで考えておくべきことは、生産と供給の関係で、両者は通常異なるわけであり、生産-自家消費=供給となる。しかし前述のように繭は、農家保有をもととする在庫期間内の供給がほとんどなく、更に、繭の自家消費はあまりなされず、商品化率は98%以上と言われていることを勘案すれば、凡そ生産量より供給の動向を類推すること

が可能となる。

なお、製糸業者の原料購入は蚕期ごとに行われても、ほゞ1年間にこれを消費するのが普通であるから、購入時期は利子部分の問題のみになるのであるし、更に短期的な供給変動の研究はあまり意味がないのでこゝでは割愛することにした。

次に人為の支配し得ない自然的条件、特に気象条件および病害虫発生より起る生産量の変動について考察を試みてみよう。これを計測するのはかなり困難な問題で、現在、過去の状況を正確に把握することは不可能である。そこで計測可能と思われる方法の検討にメスを加えてみたい。これは全国的に大きな災禍を蒙つた年次をチェックして、生産量と桑園面積の両面をにらみあわせて判断する方法である。しかし災害の規模や程度によつては他の地方の気象条件の良し悪しの方がむしろ大きく作用してしまうので、その災害について判断することがむづかしい。そこで先づ桑園面積当りの反当収繭量について分析を行つてみた。反収変動に関係する要因を要約すると、1. 土地条件の変化：食糧事情などで桑の栽培地がよいところになつたり悪くなつたりする、2. 技術の進歩：農薬、肥料等の改善も含まれている、3. 病害虫の発生状況、4. 気象条件等、である。次に反当収繭量の年次別変動を示してみよう。

第3表 反当収繭量および桑園の主なる災禍

年次	反収	大 災 害	年次	反収	大 災 害
昭和1年	15.2		昭和17年	13.6	霜害、風害
2	15.3		18	14.9	
3	15.4	病虫害	19	13.2	
4	16.3		20	9.3	
5	14.9		21	9.8	
6	14.2		22	8.3	凍霜害
7	13.7		23	—	
8	15.8		24	9.5	風水害
9	14.0	風害、旱害	25	12.2	
10	14.2		26	14.0	
11	14.6		27	15.9	
12	15.3		28	14.2	凍霜害
13	13.7	風水害	29	14.7	冷害、凍霜害
14	17.0	凍、霜害	30	16.1	
15	16.4		31	15.0	
16	14.1	風害	32	16.5	

註 数値は昭和元年~21年は農林大臣官房統計課、昭和22年~27年は蚕糸局、昭和28年以降は農林省統計調査部のそれぞれの調査である。

上表の数値読み取り上で注意する必要があるのは、昭和20~24年までは食糧事情の逼迫より来る食糧作物の桑

園間作と、良質桑園の作付転換による桑園の劣等地位、および肥料不足による結果であつて、また昭和26年から29年までは繭不足から、団体契約以外に個人的に闇売りされたと思像される部分だけ統計に入っていないということで、これをプラスして考える必要がある。なおこの表に示した災害は育蚕中に起る蚕病害は計算されていないし、また災害を蒙らない畑の気象条件も問題にしているが、気象条件と反収にはかなりの相関度があるものと想像される。しかしいづれにしてもこれらの災害は現在の段階では人為的に解決し難い問題であるから、繭生産の調節を行う上に非常な衝害となつている事は否めない事実であろう。

このように追究してみると養蚕農家における繭供給は、長期的趨勢としてはかなり大きく変動し得るが、桑樹が永年作物であり、自家消費があまり行ひ難い事情などもあつて、短期的に景気変動に対応して調節することはできない。またこのような現段階においては団体契約にしばられ、製糸業者も生糸の需要状態をにらみあわせて繭の購入量の調整を行うことも、かなり困難を伴うのであつて、生糸の滞貨が繭価格低落という形で主に調整されることになる。

## 2. 繭の価格

元来繭の価格は他財貨との交換価値を表わすのと、需要と供給の調節を行う、といった2つの重要な機能を持つている。本研究は主として第2の問題特に供給面を中心として取扱つたのであるが、論旨を進めるための過程として先づ他財貨と交換価値についての考察からはじめることにする。これは結局価格形成の問題につながるわけであるが、繭価格決定には製糸および、養蚕の各業者の代表、官公庁の役人からなる繭価の決定委員会がある。しかしして横浜、神戸の取引市場の現物生糸価格から、諸経費を差引いて繭価の掛目

$$\left( \text{掛目} = \frac{\text{糸価} - (\text{加工費} + \text{利潤})}{16} \right)$$

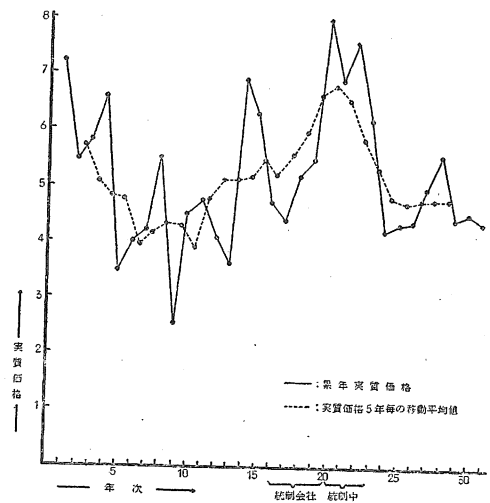
という形で決められるのである。この場合繭生産費は参考にする程度である。しかしして生糸価格は繭糸価格安定法で上、下の価格限界が決められている関係上繭価にも間接的に影響が出てくる。この2つの事象は繭価決定上最大の特徴で、消費者を中心とした考え方であるともいえるのであつて、養蚕農民の製糸業者への隷属性を形成し易くする原因となつている。

さて第2の需給の問題であるが、繭は生糸が他の人造繊維や化学繊維等に比べ質的な相違はあるが生糸が上級財であり、市場の好況不況が消費量を通じて強く価格に作用するのである。生糸の価格について長期的趨勢を考えてみよう。

一般に繭の市場売買価格は非常に急テンポに上昇の傾

向を示している。しかしこれは当時の戦争の影響などによるインフレ的傾向から一般物価の急激な騰貴があるので、このような要因を捨象するため累年の繭価格を日銀卸売物価指数で換算し、これを実質価格と名付けて、これより変動状況の考察を行うことにした。例えば昭和元年は上繭一貫当りの市場平均は8.35円であるから、日銀卸売物価指数115.7より  $\frac{8.35}{115.7} \times 100 = 7.22$  (実質価格) として算出されるのである。なおここで如何なる物価指数を用いて換算するかは算出された実質価格に影響があるので、かなり重要な問題であるが、繭の価格は農村問題のみで決まるものでなく、また繭は直接工業原料となり、小売りされる場合も少ないことなども考慮に入れて、日銀卸売物価指数を用いることにした。次に昭和初年よりの繭価の変遷をグラフに示してみよう。

第1図 上繭実質価格の変遷



註 このグラフは蚕糸要覧(1958)の數値を日銀卸売物価指数(昭和9~11年を100とす)で換算したのによつて作成した。

このグラフによつて総括的に考察されることは、繭の価格変動は農産物一般の特性にならつてかなり大きいことである。以下順次甚だしく変動した年度の個別事情について追及してみよう。先づ昭和9年は下級財である人絹類の進出に加えて世界的恐慌のおりをうけ、繭価は一時急激に低落した。そこで当時価格維持のため諸般の施策が講ぜられ法律によつても保護が加えられた。昭和16年から23年までは蚕糸統制の時期であるが、昭和20年の終戦により貿易は再会されて、繭価はかなり実質的にも上昇した。しかし当時世相は食糧不足であえぎ食糧農産物の高騰は繭価上昇を上まわるものがあつたため、繭の生産は伸び悩んで、価格上昇に拍車をかけることになつた。食糧事情の緩和と共に繭の生産量も漸増したが、

一面化学繊維の進出によつて、予想以上の輸出不振を招来し、生糸の滞貨が増大し、価格も低落の止むなき事情にたち至つた。昭和25年の朝鮮動乱の勃発は我國の經濟事情に対する救済的な出来事で、輸出は活況を呈し、生糸も滞貨は漸減し、繭の市場売買価格は上昇の一途を辿つた。しかしして実質価格にまで影響を見るに至つたのは昭和28年頃のことである。朝鮮動乱の終結と共に再び不況となり、近年来纖維産業全体にみられる過剰生産に加えて、輸出不振とからみ合せた滞貨激増から繭価はかなり低落し、慢性的な恐慌の様相を呈している。

この様に種々の変遷をたどつて来たのであるが、およそ蚕糸業は戦前より不利な産業と言われているが実質的価格の観点からみれば、昭和9年の2.54や昭和13年の3.61より、未だ上位となるのである。しかし長期的な価格変動は昭和元年より31年までの間に平均2.1%づゝ低下し、更に蚕の品種改良による繭の軽量化に伴う糸歩のかなり大巾に増大した事実を考慮に入ると、技術向上より来る生産費の低下を考えに入れても、なお決して有利になつていないという結論が出てくる。なお繭の価格変動には週期があるかどうかはかなり興味をそゝる問題であるが、調査対象年次が短いので一応こゝでは一般の景気より影響を受けて波があることを述べる程度に止めたい。次にこのような価格変動が桑園の作付面積にどのように影響するかを知るために桑園面積と短期的価格変動との間の関係を調べてみた。

先づ対前年価格変動と桑園面積の変動を計算し、両者の関係をみると常に正の相関関係になつていない。例えば桑園面積は他の物価などの相対的關係や国の政策等によりかなり大きな変動をもたらしているのである。すなわち昭和18年頃より昭和22までは繭の実質価格はむしろ上昇しているのに桑園面積は通減の傾向を示している。このような負の結果を生ずることもあるので、一応総括的な傾向をみるため両者の相関係数を求めてみると、プラスではあるが零に非常に近い0.00286という値となる。すなわち短期的には両者の関係はさほど強いつながりがなく、むしろ他の強力な要因により大きく支配される場合が多い。しかし長期的にこれを観察する場合には両者共通減の傾向を示し、かなりの関係があると見做してよからう。

更にやゝ短期的に価格変動をみるために対前年の価格変動を計算し、この階層区分を行つてみよう。

価格低下が生じた年は30年度間に15回で、騰貴した年より少ない。しかるに全体からみて実質価格が前述のように低下していることとらみ合わせると、下落した年はその度がかなり著しいことが解る。一般に物価は上昇させることは容易であるが、下落の方はなかなか困難で、

第4表 対前年実質価格変動率の階層区分

変動率	~ +30	+30 ~ +20	+20 ~ +10	+10 ~ 0	0 ~ -10	-10 ~ -20	-20 ~ -30	-30 ~	計
頻度	3	2	4	8	3	4	3	3	30

農林省統計表より算出

下落するに至るには余程の原因が必要である。特に生糸は輸出を重要とした財で、政府や公共団体が価格決定に介入する機会が多いから、このような傾向は一層鮮明に表われてくる。次に対前年平均価格変動率を計算してみると、実に20.9%という驚くべき数値となる。甘藷なども戦後はかなり大きな変動を示しているが、繭は主要農産物中で最高位を示しているのであつて、生糸が上級財であり価格変動が大きい揚句、更に輸出不振による価格低落がこれに拍車をかけた結果と思われるのである。

### 3. 繭供給の価格弾力性

以上2つの結果を総合したものととして、繭供給の弾力性

$$\frac{dy}{y} = \frac{\frac{ds}{s}}{\frac{dp}{p}}$$

を計算してみると第5表の如くである。そ

第5表 繭供給の価格弾力性値

年次	弾力性	年次	弾力性	年次	弾力性	年次	弾力性
昭和1年		昭和9年	+0.26	昭和17年	+2.86	昭和25年	+9.61
2	-0.22	10	-0.07	18	-0.12	26	+7.67
3	+0.49	11	+0.19	19	-4.23	27	+0.77
4	+0.73	12	-0.26	20	-1.60	28	-0.85
5	-0.09	13	+1.07	21	+1.39	29	-0.38
6	-0.56	14	+0.23	22	-2.19	30	+6.09
7	-1.59	15	+0.39	23	-1.05	31	-1.74
8	+0.43	16	+0.82	24	+0.09	32	-

もそも弾力性というのは短期間における変動を問題としてとりあげるのであるが、この表から解るように弾力性の値は-4.23から+9.61までとなつている。この数値は長期趨勢及び自然条件の変動を除去していないので、プラスが若干多く出て来ているとしても、これ等を考慮するとあまりはつきりした傾向は表われない。すなわち、繭の供給は短期的に考えれば、価格に大した影響を受けないということがわかる。つまり繭の価格は消費面よりの影響を強く受け、生産の方まで充分コントロールが出来ていないものと見做される。

### 4. 正常繭価格を決定する要因

一般に物価は需要と供給の關係から決定されるべきであつて、統制価格を保持している繭の場合にも、長期的にみれば当然これに当嵌まるのである。しかし少し短期的

に考察すると前述のように繭価は生糸の市場価格によって決定されるのであつて、生産費は左程問題にされない。

すなわちこのようなことは、生糸が上級財である関係上需要量の変動にかなり差違のあることを重視し、繭糸価格安定法により繭価は他動的に決定づけられる。そこで桑樹が永年作物で繭生産の硬直性を起しても何とか切りぬけ得るという安易な気持より起つていたと思われる。しかし、当今の慢性的な生産過剰は繭消費および生産量をもととする需要供給のバランスの重要性を認識させる結果となつた。このような観点からすると、繭の需要供給両面を決定する要因を再検討し、この両者をどのように均衡させるかを考究する必要性を痛感するのである。

繭の需要は絹の消費量に直結するが、この両者の間には加工や貯蔵の過程があるから、時間的にズレを生ずる。このようなことは通常コンスタントに動いている時は潤滑油的な役割をもっているが、強力な変動期にはむしろ思惑的売買なども関係して繭糸価格の変動に一層拍車をかける結果となる場合が多い。一般に絹の消費を変動せしめる原因は、人口、支出国民所得、選択嗜好および代替などである。このうち長期的な変動要因の主なるものは、人造繊維、化学繊維という代替物の進出の結果必然的に生じて来るものである。これは

$$\frac{\text{絹の限界効用}}{\text{絹1単位の価格}} > \frac{\text{化学(人造)繊維の限界効用}}{\text{化学(人造)繊維1単位の価格}}$$

として比較されるわけであるが、近年の変動は化繊の品質改良および多量生産による生産費低廉化より起る絹の相対的効用の減少の結果、絹消費の減少によつて招来するのである。

次に短期的な消費変動の起因を見ると、およそ日本および米国の支出国民所得として表われて来る景気変動と考えられる。この両者の主要な消費変動によつて最近の繭の需要は決定されている。一面繭の生産は、自然的、社会的、経済的の諸条件と更に養蚕農家の個別事情などによつて決定される。この問題についての概略は既に前述したのであるが、凡そ長期的な供給変動は経済的条件(特に価格趨勢)に影響され、短期的な変動は経済的条件と自然的条件によつて大幅に支配されることが多い。かくして両者は各々独立に価格決定が行われるのであるが、繭生産費と販売価格との間にはかなりのズレが生じている。

今試みに農林省統計調査部(昭和31年)の調査結果をみると、上繭貫当生産費1,965円(租税公課を含む)に対し、販売価格はこれより低く1,570円になつている。このようなことは我国の小農が労賃日当の評価を低く見積つていることに起因する矛盾なのである。すなわち繭は労働集約的生産であつて家族労賃が生産費中の50%以上を占

めていることから、反当純収益からみれば他の畑作物に比べてかなり高位を占めていることによるものと云えよう。およそ養蚕農民は繭の販売価格が下つても、短期的には労働評価を低くして獲得する所得の限界単位によつて与えられる満足が、丁度それだけの所得を生むための苦痛と同じ点まで生産に従事しようとするのであつて、時には価格低落に対し供給量を増す事によつて対抗する場合も起り、繭の価格は需給を調節する機能を失なわしめる結果となる。そこで小農をもととする我国養蚕業の根本的な問題が起るわけであつて、労働賃金は他農業経営部門の稼得労賃や、他農家および山林等への出稼により得られる賃銀と比較して、限界単位労働によつて得られる報酬を同一になる様に養蚕部門の労働生産性をあげるため、機械化や共同作業の必要性は当然生じて来るのであるし、時には生産規模の縮小化を行わしめる必要もある。このように需要が価格に影響することは当然としても、供給が価格により影響されると同時に示唆を与える様に、生産農民の力を強くする必要が生じてくる。また正常な繭価格は需給の調節によつて生ずるもので、現在の様に団体契約取引が行われても小農の弱味をばくろし、製糸業者への隷属的色彩が強く出ている様な形式による価格の決定は、不況に対して極めて弱いのであつて、このことは今後改善される必要があらう。

昭和33年には生糸の慢性的過剰に加ふるに世界的な不況も手伝つて、生糸暴落より起る繭価の低落が急激に起つてきた。これに対処する養蚕農民がどのように考えまた何を行つているかを究め、それによつて繭生産の硬直性を論ずることも無意味ではあるまい。

##### 5 繭供給を決する養蚕農民の考え方

これまでの研究はマクロな考察であつたが、こゝで少し個別経営の立場に立つ養蚕農民の考え方について分析することにしたい。およそ繭の生産は最終的には養蚕農民が行うのであるから、農民の判断が繭生産に及ぼす影響はけだし大きいものがある。

筆者は大規模経営と小規模経営の典型である島根県八東郡八東村(大根島)と松江市において各々16ヶの計32戸に聴取りを行い、繭価変動に対する養蚕農民の考えを調査した。八東村は畑地が主体で、人口は多く、朝鮮人蔘、海産物と養蚕がこの島の経済の三大支柱であつて、養蚕経営の規模も大きい。一方松江市は都市近郊であるため、水田および蔬菜作の圧力を強くこうむり、養蚕農家は点在しているが経営規模は小さく、養蚕に対してあまり熱意をもたない。以下調査結果の概要を述べてみよう。先づ繭の生産の硬直性を起している原因を探究するため、第1にこの対立した条件を、2つの地区に分けてどのように養蚕が行われているかを考察してみよう。結言すれば大

根島の場合は畑が多く米を島外より移入する必要から換金作物を作る必要がある。しかし、粗収益の大きい朝鮮人蔘は30年間弥地があるから、輪作物として桑樹を植えるのである。松江市は土地条件の左程よくない処に桑園を設け、養蚕部門のみでは確かに有利でないことを認めながら、季節的労働配分や現金収入などの面から総合的な農業経営の合理化のため養蚕を行つている場合が多い。そこで後者の場合にはかなりの現金収入のある代替物が発見される場合は簡単に作付転換が行われるが、現在のところかなり長期間作付出来るにふさわしい作物がない様に窺われる。従つて両地区とも改植にはむしろ消極的である。第2に桑樹が永年作物であり、改植や引抜きにかなりの費用もかかるので、相当長期の予測を行わなければ簡単には転換し得ないが、現在の養蚕農民はそれだけの自信をもつて行動出来ない人が多い。第3に桑葉の利用は今のところ、飼料としてか緑肥以外にほとんど利用されていない現状である。すなわち桑樹が植付けてあれば桑園は生産され、桑葉の生産は繭生産という形になつて景気に適応して、繭の生産を調節することは困難である。第4に桑条や桑株は平坦地区における農家の燃料としてかなり有用なもので、年間一定量の需要がある。以上のような理由によつて規模の伸縮に消極的となつている結果と思われる。

次に経営階層別に繭の価格変動に対する関心を考えてみよう。そもそも養蚕農民の価格変化への対抗策としては2つのことが指摘される。

1つは桑園面積の増減であり、他は桑園反当に投下する労働と資本財の増減である。この両地域で大規模に養蚕経営を行つている農家は価格変化にかなり強い関心を持つている。ところで現在の経営規模を強力にしようと努めているが、それが支え切れなくなつた場合には反当りの投下労働や資本財を左程変化させないで、最初の段階では価格低下に対し労働はむしろ逆に従来より一層多く投じようとする動向が窺われ、後次第に粗放化傾向を示す。

松江市は小規模経営農家が多いが、価格低落の対策としては桑葉の生産だけを行い、2~3年の景気変動をみようとするものや、間作をとり入れようとするもの、また価格変動に無関心で、たゞ老婆の小遣い稼ぎの経営を行うものなどがある。更に価格変動には強い関心はもつていますが、労働資本財の配分を重視して、適度な養蚕を農業経営の一環として常に維持して行こうとするものが見受けられる。いづれにしても農家は従来の伝承にかなりの支配を受け、経営規模を変化さすことにはむしろ消極的で、たとえ規模の変更を行う場合でも生糸価格や繭価格の変動から、かなりのラグを持つて行われる。以上の

調査は未だ対象個体数も少く、これを以て首題のことをすべて決定づけることはできないが、こゝでは一応それを方向づける程度に止めて置きたい。

### 結 言

今日蚕糸業は曲り角にきている。繭糸の価格は著しく低落した。そこで全養連は自主的にしる桑園面積の2割作付制限を提案している。ところでふりかえつて最近の価格低落の傾向を見るとあながち生糸のみ問題ではない。繊維産業はのきなみに3割から5割以上の繰短を行つている実情であつて、こゝ数年間においても生産過剰より来る農産物の暴落は米を除けば1~2回はおとづれているのであつて、たゞ繭の価格低落だけについてはそれほど驚くには当たらない。ところでこの慢性的な価格下落の傾向には大いに注目すべき必要がある。景気変動に対抗するには2つの方策が考えられる。それには繭生産費の低減と需給量の増減を指摘することができる。生産費の低廉については過去数十年来かなり研究が行はれて、その成果は向上している。

今日の繭生産費低廉の方策には、桑樹および蚕の品種改良、稚蚕共同飼育をはじめとする各種共同作業の徹底、小規模機械設備の導入などによる繭労働生産性の向上などが不可欠の条件として考えられる。価格決定には繭生産費が当然参考にするべきであつて、短期的価格変動を調節するための繭糸価格安定法が実効を挙げ得なかつたのも、このようなことに起因したものである。さて、そこで繭の価格をどの程度にすれば需要がどれ程増減するかは他産業の景気にも関連することであつてその計測は困難である。この種のことは今後に残された重要な研究課題といえよう。

次に繭の供給量の増減であるが、桑樹は永年作物であるにかゝらず、長期趨勢としてはかなり変動がはげしいのである。しかし短期的な価格変動に対しては生産の硬直性を生じている。長期的な計画を行うことは勿論必要であり、今日問題となつている繭糸統制会社も繭の貯蔵面からみて、一時的に繭価安定を行いうると思ふが、結局最良の打開策としては需要面の拡大により、供給繭を可及的に速く消化させることがその要訣でなからうか。

### 参 考 文 献

- 井上龍夫 農産物価格および供給の短期変動 現代農業分析の展望 大明堂 第3章第5節 1958  
井上龍夫 小農経済における農産物価格の変動と形成 農経研 29(4) P1~P8 1957  
大川一司、野田孜 農産物需要の所得弾力性 農経研 9(2) P1~P37 1955

- 小西俊夫 日本蚕糸業における脆弱性とその克服  
農業における経営と政策 富民社  
P101~P116 1951
- 児玉守二 アメリカにおける農産物の需要・供給の分析  
現代農業分析の展望 大明堂 第3章第6節補  
論 1958
- 野田 孜 農産物需要・価格の長期変動 現代農業分析  
の展望 大明堂 第3章第6節 1958
- 菱谷政種 生糸供給弾力性の寡小性 蚕糸界報  
63(734) P17~P22 1954
- G. S. シェフアード著 農業総研訳 農産物価格分析論  
東大出版 P110~P138 1953
- T. W. シュルツ著 川野, 馬場監訳 農業の経済組織  
中央公論 P219~P306 1958
- C. Gislason The Nature of the Aggregate Supply  
of Agricultural Products Journal of  
Farm Economics 34 (1) P85~P95 1952